

発行

北海道ポーランド文化協会
〒006-0006
札幌市手稲区西宮の沢6条
1丁目16-1-210 佐光方
電話・FAX 011-215-6696
samitsu0204@gmail.com

POLE

第82号 2014. 5. 15
北海道ポーランド文化協会誌

創立から26年
刻んだ足跡に
「文化功労賞」



第68回例会

朗読会へのご招待

午後のポエジア

Part4



2014. 6/14 (土)

開演 PM 2:00

(開場 30 分前)

北大クラーク会館 3F
国際文化交流活動室



《午後のポエジア》は日本人とポーランド人が家族や友人ぐるみで広く交流する、市民に開かれたつどいです。

出しものは朗読のほか、映像、歌やギター、篠笛、三味線などと幅が広がって、次は何が飛び出してくるか、とても楽しみです。毎回ポーランドの女性たちが手作りしてくださるケーキも人気の的です。

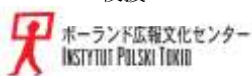
北海道は青葉の季節。北大正門から緑の木陰を進みクラーク会館に着くと、会場はポーランドの香りがいっぱいです。お友達を誘ってお気軽にご参加ください。

※写真は過去の朗読会風景

どなたも入場無料
ケーキつき

予約不要。直接会場へお越しください！

後援



札幌市・札幌市
教育委員会



※詳しくは、同封のフライヤーをご参照ください。

第69回特別例会(東京にて)

戦後六十九年ぶりに未公開写真でたどる樺太のポーランド人の旅路

樺太時代に生きた ポーランド人

講演会

～彼らはどこから来て、いかに生き、
そして、どこへ帰ったのか～



講師 尾形 芳秀

(北海道ポーランド文化協会会員)

日時：2014年6月28日(土)
14時～16時
場所：駐日ポーランド共和国大使館
(東京都目黒区三田2-13-5)

参加希望者は6月20日(金)まで
に以下へご連絡ください。

携帯:090-6447-1700(佐光);
メール:ssamitsu@hotmail.com

入場無料

本年2月にコザチェフスキ駐日大使が札幌にみえて、道庁赤レンガ庁舎の樺太関係資料館で樺太残留・亡命ポーランド人の記録を見学されたのがきっかけとなって、東京での講演会が実現しました。稀な機会ですので、在京会員のみならず多数ご参加いただき、懇親の機会ともしたいと思っております。また北海道の会員のみならずには、首都圏のお知り合いをこの催しにお誘いいただければ幸いです。さらに、お誘いできる個人、団体の情報をいただければ、事務局より直接チラシ等を送らせていただきます。よろしくお申し込み申し上げます。

会長 安藤厚

※詳しくは、同封のフライヤーをご参照ください。



豊原高等女学校に学んだポーランド女性

日本時代の樺太にポーランド人がいたことは
ほとんど知られていない
わずかに残されている日本の公式資料を
読み解いたものはみかけられない
母国から1万キロ以上も離れた樺太に
彼らは なぜ、残留の道を選んだのか
なぜ、日本人と共生したのか…

日本とポーランドの交流史の空白を
今、明らかにしたい…



小沼のチェハンスキ家のログハウス



樺太時代のポーランド人の結婚式

後援:



トルンの町の名の起こり



何百年も前の昔のこと、ヴィスワ川の曲がりくねった所に町が建ちました。町の住民たちは、川の流れの湾曲部での急激な変化がもたらす危険を恐れ、安全な状態で暮らせることを切に願っていました。それで町を城壁と塔で囲んで護ることになりました。

建てられた塔のうちの 하나가、自分のそばを流れる川と話をすることが好きになりました。

「大好きなヴィスワさん、わたしはあなたがうらやましいわ！ あなたは山々を通り過ぎ、谷間を通り過ぎ、町々や村々を通り過ぎて海に注ぐまで流れてゆくのよ、わたしはここに立ったまま退屈しているのよ」と哀れな塔は話しました。

「それは本当ね。わたしはあなたに同情するわ。わたしは面白い場所ばかり眺めているから、一度も退屈したことなんかないわ」とヴィスワは答えました。

多くの時間が流れました。ヴィスワの生活はますます楽しくなってきました。川は途中で見たことをいつも塔に話して聞かせました。しかし、まもなく塔は自分の友達の話を聞くことを喜ばなくなりました。塔は川に、話を止めてくれるように、頼みました。しかしヴィスワは塔に無理やり自分の話を聞かせようとしました。それでヴィスワ川の波はますます強く塔の外壁を洗いました。塔は傾きはじめました。「ヴィスワさん、止めて！ 止めて！ 倒れちゃうよ！（ルネン rune）」捨て鉢になって塔は叫びました。「ならば、倒れよ！（ト、ルン To ruń）」とヴィスワは答えました。

ちょうどその時、二人の商人が旅をして町に近づいてきました。遠くから町の城壁と塔が見えました。



ヴィスワ川とトルンの城壁の塔
Legendy Toruńskie, «Literat», Toruń, 2007 より

「あれは何という町なのだろうね？」と二人は興味をもって、尋ねるように、口をそろえて言いました。「ト、ルン！（ならば、倒れよ！）」というヴィスワの言葉がこだまとなって二人の耳に響きました。

「トルンだとさ」

こうして「トルン」がこの町の名となりました。

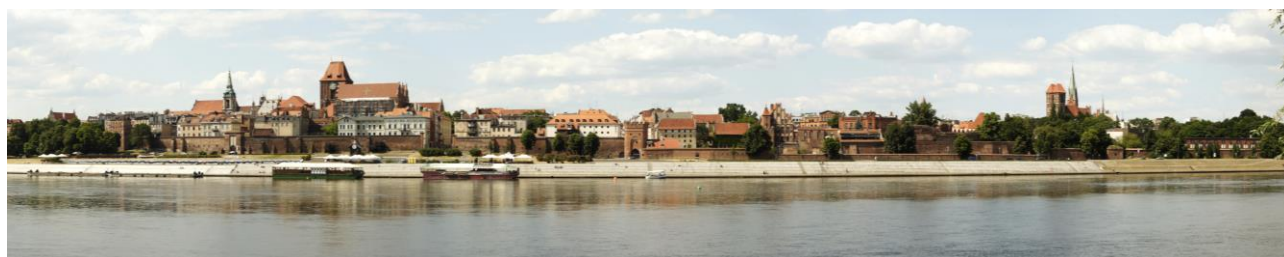


Toruń (トルン) の町名の起源を説明する民衆による民間語源説です。

「ト to」は「それならば」という意味の接続詞、「ルン (ルニ) ruń」は「ルノンチ runąć 倒れる」という動詞の命令形 (2人称単数) です。

「ヴィスワ川 Rzeka Wisła」、「塔 baszta」は共に女性名詞で、擬人化されると女性になります。

栗原 成郎 (東京大学名誉教授)



ヴィスワ川よりトルン旧市街 (左) と新市街 (右端) を望む (ウィキペディア日本語版より)

ワルシャワの地下鉄

岡崎 恒夫

今年(2014年)は1989年の民主化からちょうど25年目に当たるので、この25年間でワルシャワにとって何が一番大事な出来事だったかという市民投票を行ったところ、ダントツで「地下鉄建設」が一位でした。

建設着工が1983年、95年に全路線の半分ほどが開通して、全線開通は2008年ですから、着工から実に25年かかっています。ところが、その全線というのが1路線23キロだけ、端から端まで40分弱で行けるのですから驚きです。ロンドン地下鉄の400キロ、パリの201キロ、東京の304キロ、大阪の129キロと比べて、小人と巨人の違いです。札幌地下鉄の総路線の半分、東西線の長さとはほぼ同じといえば、札幌の皆さんにはわかりやすいでしょう。

その地下鉄建設の計画は戦前からあり、計画されては消え、つぎもまたその繰り返しといった状態でした。こんなに時間がかかった主な原因は、まずポーランドが旧大陸にあるため、どこも砂地ばかりで地盤が極めて弱いことが挙げられます。戦前は地盤を強化するための技術が未発達で計画倒れになりました。着工した共産主義時代は、弱体化した共産主義を回復するための秘策として地下鉄工事を始めたものの、結局財政が持たなかったというのが真相のようです。

着工した当初わが息子は小学一年生でした。わが家から旧市街にある学校までバスで40分近くかかるので、地下鉄ができれば渋滞もなく速く学校に行けると期待していたのですが、出来上がったときに彼はすでに31歳の社会人になっていました。

全路線23キロの間に駅が21あります。地下鉄全体の職員は1,700人で、そのうち140人ほどが運転手だそうです。毎日50万人の乗客を運び、市民の足として大活躍です。

工事が始まった頃、地上の道路は、自動車数が少ないこともあって、渋滞など特別な日にしかありませんでした。25年かけて建設しているうちに社会主義から自由経済主義に変わり、それに伴ってモータリゼーションが急速に進みました。初めの頃、道路はこんなにガラガラなのに、なぜあちこち道路を閉め、掘り返して地下鉄などを作るのかといふか

おかざき つねお 1944年中国・瀋陽(奉天)生まれ、下関で育つ。1970年よりワルシャワ在住、ワルシャワ大学日本学科講師、東洋学部副学部長を歴任、現在は同特任講師、NHKラジオ深夜便「ワールドネットワーク」ポーランド・リポーター。



っていたのですが、今や地下鉄なら10分で行けるところを、自動車だと小1時間かかることを思えば、こういうのを「先見の明」というだと納得しています。

現在ワルシャワでは新たに東西線を建設中です。工事が始まってすでに3年以上経っていますが、川底の下を通らせるという難工事があって、開通は延び延びになっていて、これから何年かかるか見通しが立ちません。「来年までにプウ・メトラできる」という、市民の間で流行った笑い話があります。このプウ・メトラの意味は、「地下鉄の半分」という意味と「半メートル」(50センチ)の意味があります。

では、ワルシャワの地下鉄の長所を市民の声から拾ってみましょう。

その一:スピード。年ごとに長くなる地上の渋滞をよそ目に、地下鉄は確かに早くその上時間通りに運行されるので市民の信頼を勝ち取っています。また地下鉄の駅周辺には駐車場が設けられていて、市外から自動車で来た人が最寄の駅に駐車して地下鉄に乗り換えることが流行っています。ラッシュ時には3分間隔ぐらいで運行されています(これ



ワルシャワの地下鉄

は日本と同じでしょうか)。

その二: 車輦も駅も清潔なこと。ニューヨークの地下鉄のような落書きは一つもありません。地下鉄といえば埃っぽかったり、特別なにおいが漂ったりしますが、開業 20 年になろうというのに、この地下鉄は全くそんな気配はありません。最新アンケートによれば、車輦内の清潔度は 83%、駅は 91% が満足しています。私もヨーロッパの多くの国で地下鉄を利用しましたが、確かにワルシャワの地下鉄はきれいです。最近 CNN が選んだ全ヨーロッパで最も美しい 12 の駅の中に入っています。

その三: 高齢者、身障者、子供連れの母親、車椅子利用者のためのエレベーターは各駅に複数備わっていて、大変評判が高いです。乳母車や自転車の持ち込み、さらに動物(犬、猫)を連れて乗ることも可です。

各駅のホームのデザインがそれぞれ違うので、駅名を知らなくてもどの駅にいるかわかるように工夫されています。これもたった1路線 21 駅しかないワルシャワ地下鉄の特徴かもしれません。

ただ、いいことばかりではなく、朝晩ラッシュ時の込みようはかつての日本を思い出します。車内の広告も多すぎてあまり評判がよくありません。しかしこんなことも吹き飛ばしてしまうくらいワルシャワ市民

は地下鉄が好きで、もうこれ抜きでの移動は考えられないという人がたくさんいます。

「ラジオ深夜便」と岡崎恒夫先生

ポーランドの言葉も文化を知らないまま、主人について曇り空のもと落ち葉の舞い散るワルシャワの街に足を踏み入れたのは、1976 年の秋でした。当時のポーランドは社会主義国家であったため、自由な日本からまいりました私は種々の習慣の違いに驚くことの多い毎日でした。そのようなときワルシャワ大学の岡崎恒夫先生と知り合い、ワルシャワで生活するにあたっての必要な情報をいろいろ教えていただいたおかげで、一年間のワルシャワ生活を無事に楽しく送ることができました。

あるときふとNHKの深夜のFM放送を聞いていたら、ワルシャワの岡崎先生の歯切れの良い、懐かしい声が聞こえました。海外リポーターとしてワールドネットワークを担当されていることを知りました。それ以来、この放送を必ず聞いています。放送予定は月刊誌『ラジオ深夜便』で分かります。

栗原朋友子

新シリーズ《ポーランドからの便り》



日本に親近感を持つ ポーランド人

松本 照男

1. 桜の花咲く国、日本という美称

日本の経済ミッションなどがポーランドにきて、パーティーなどの折り、ポーランド側の挨拶の冒頭で「桜の花咲く日本からお越しの皆様を心より歓迎いたします」という表現にしばしば出会います。単に《from Japan》ではなく「桜の花咲く国」という美称で、ポーランド語では《z kraju kwitnącej wiśni》といいます。他の欧米諸国のどの国が日本をこのような美称で呼んでくれるでしょうか？

わたし自身このような表現に何百回となく出会い

まつもと てるお 1942 年、埼玉県生まれ。明治大学法学部卒、ポーランド政府奨学金を受けて留学、ワルシャワ大学大学院ジャーナリズム研究所修士課程修了、同政治学研究所博士課程中退。ワルシャワ在住のジャーナリストとして活躍。



ましたので、あるときそういうポーランド人に「あなたはなぜ日本をそのような美称で呼ぶのですか？」と聞いてみました。「なぜといわれても困りますが、昔

から日本のことはそう表現するものだと、知らぬまに頭に入っています」というのが圧倒的多数の答えです。ポーランド社会のなかに、なにやら漠然とした親日感情があるのは肌で感じますが、それがどこからくるのかは、充分判らないままでした。

さあ、それからがわたしの探索の旅の始まりです。キーワードともいえる「桜の花咲く日本」を手がかりに、1970年代に各層のポーランド人に聞きまわり、図書館や古文書館で書物や雑誌、写真などをいろいろ調べてみました。

2. 親日感情の源泉

ポーランド人が日本に親近感をいだく源泉ともいえる4つの事項について簡単にご説明します。なお、日本とポーランドの正式な国交樹立は1919年3月ですから、それ以来の両国の交流期間は(戦後の国交断絶期間も含めて)わずか95年です。

1) 日露戦争の影響

まず日露戦争の影響を「敵の敵は味方」という言葉で説明したいと思います。当時、ポーランドは帝政ロシア(…ばかりではありませんが)の圧政に苦しみ、ポーランド人にとってロシアは、いわば不倶戴天の敵でした。当時は日本にとっても、ロシアは(いまや死語でしょうが)「仮想敵国」でした。つまり、広大なロシアという「共通の敵」をはさんで、ポーランドと日本は隣国同士だったわけです。

そうした状況のなかで、近代ポーランド史で最大の英雄、あるいは統治者と評価されるユゼフ・ピウスツキ(1867-1935)=写真1=という軍人・政治家が、日露戦争開始5ヵ月目の1904年7月、密かに日本を訪れ、日本軍部に、ロシアに対抗する「日ポ軍事同盟」を提案しています。のちにポーランドの独立を達成し元帥・国家元首となったピウスツキの日ポ軍事同盟案は、このときは実現しませんでした。かれは日本側の対応に終生恩義を感じ、後年、日露戦争で軍功のあった日本軍将官51名に高位の



写真1: ユゼフ(左)/ブロニスワフ(右)・ピウスツキ

軍事勲章を授与しました。その滞在時に通訳を務めた川上俊彦は、初代ポーランド駐在大使となり(在任期間:1921年5月-1923年2月)。

ちなみに、ユゼフの兄ブロニスワフ(1866-1918)=写真1=は、ロシア皇帝暗殺の陰謀に加わったとして、弟とともに樺太(サハリン)に15年間の流刑になり、刑期終了後はサハリンや北海道でアイヌをはじめ少数民族の研究を行い、多量の写真や音声資料(ろう管)を残しました。また樺太アイヌの酋長の姪を娶り、その子供たち(息子と娘)は戦後北海道に移住し、そのご家族は現在も日本で暮らしておられます。その子孫の木村さんご一家は、ポーランドを訪問してピウスツキ家の子孫の方とも交流しております。昨年10月には、1903年夏にブロニスワフがアイヌ調査のため滞在した白老に、ポーランド政府によってかれの顕彰碑が建立されました。

ロシア軍のなかには何十万人ものポーランド人が徴兵されており、日露戦争で日本軍の捕虜となったロシア兵約8万人のうち約20%(1万6千人)はポーランド人といわれます。捕虜たちは四国の松山を中心に日本国内28ヶ所に收容されましたが、日本側の尋問に多くの捕虜が「わたしはポーランド人だ」と名乗り出たとのことです。この事態に驚いた日本側はポーランド人をロシア人と区別して收容し、丁重に扱いました=写真2=。こうした対応には、捕虜の取り扱いを定めたハーグ条約(1899年)の精神にのっとり、国際社会で日本を文明国として認めさせたいという思惑もあったようです。

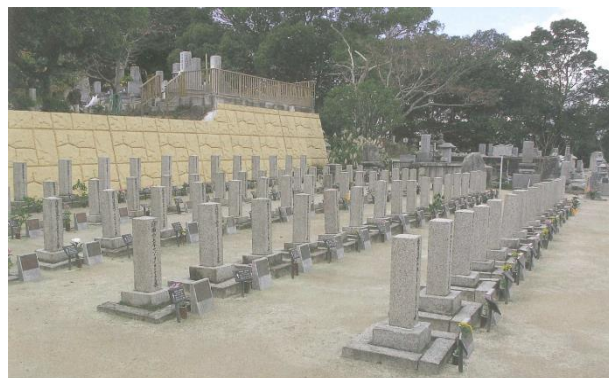
日本側の思惑はともかく、日本での捕虜生活に多くのポーランド人はよい印象を持ったようです。祖国へ帰還後、多くの人々が書いた「捕虜滞在記」などたくさんのお話を読んでみると、「サムライ魂あふれる日本人」「恩義にあつい日本人」等々、亡国のポーランド人捕虜を丁重に扱った日本人に対する感謝や恩義の記述があふれております。

1982年、現役ジャーナリストだったわたしは、前年にポーランドに戒厳令をしいたヤルゼルスキ將軍の首席政治顧問で、グルニツキという方にインタビューすることができました。雑談になって、同氏は「わたしには夢があります。乃木將軍や東郷元帥の伝記を書きたいのです」と語りました。よく聞いてみると、グルニツキさんの伯父さんが捕虜として日本で過ごし、子供の頃には日露戦争と日本滞在中の話は何十回も聞かされ、日本へ格別の思いをいだいて育ったのだそうです。

また、旧体制時代に在野のインテリゲンツィアの代表的存在だったストンマさん(数年前に亡くなられました)も、伯父さんが豊橋で捕虜生活をしてお



写真2左:ポーランド人捕虜が收容された松山・雲祥寺

写真2右:松山・御幸町のロシア人墓地
ポーランド人の墓碑が12基ある

り、戦間期にヴィルニユスの週刊誌に連載した「捕虜滞在記」の切抜きを読ませていただきました。

日露戦争に関連して、もうひとつお話ししておきたいのは、大国ロシアが極東の小国日本に敗北したことが、ヨーロッパ大陸に心理的にはマグニチュード7か8という激震をもたらしたことです。つまり帝政ロシアの屋台骨に緩みが生じ、ヨーロッパの既成の体制に大変革がおこるかも知れないという予感が沸き上がったのです。ウジュでは帝政ロシアに対する市民の大反乱がおきました。独立を失っていたポーランド社会のなかに、日本という国の光が輝くばかりの明るさで差込み、ポーランド人に希望をあたえ、将来への明るい展望をもたらしたのです。このインパクトはまことに強かったようです。

2) 第一次大戦のドイツ人捕虜

つぎは第一次大戦のドイツ兵捕虜の話です。ご承知のとおり日本は戦争末期に参戦し、中国のチンタオ(青島)に駐留するドイツ軍を攻めて4千数百人を捕虜にしました。

かつてポーランドは近隣の三大国、ロシア、ドイツ、オーストリアに三度にわたり国土を分割併合され、1795年には全土を併合されて国の独立を失いました。現在のポズナンも、ドイツ(当時はプロイセンといいました)に併合されました。

ポズナンからドイツ軍に徴兵された多くのポーランド人の一人、クレメンス・ヘルフネロフスキ(1892-1971)さんは、チンタオでドイツ兵として日本軍の捕虜になりました。捕虜たちは四国の松山や丸亀、のちには坂東に收容されましたが、当時、日本は文明国と評価されたいという願望からでしょうか、捕虜の取り扱いは寛大だったようです。

捕虜たちは無聊をなぐさめるためスポーツや音楽にいそしみました。日本人はかれらの器械体操の演技に神業をみて、器械体操のグループに日本人への指導を乞い、たちまち優秀な日本人体操

選手が何人も育ちました。ついには3ヵ月にわたる模範演技の日本全土巡回公演が組織されました。

この器械体操グループのチーフがポズナン出身のクレメンスさんで、日本の器械体操の生みの親はポーランド人だったといってもよいでしょう。1918年に独立を回復したあと、クレメンスさんは体操選手、のちにはコーチや国際審判として活躍しました。同氏にとって日本は終生忘れられない希望の地だったようです。東京オリンピックのときには審判の一人として来日したそうです。

ちなみに、最近の日本では年末の恒例行事となったベートーベンの第九を、日本ではじめて演奏したのは、坂東收容所のドイツ将兵捕虜でした。

3) ロシア革命とポーランド蜂起軍

1917年のロシア革命後、ロシアには内戦の嵐が吹き荒れ、各国列強のシベリア介入があったことは、歴史の授業でよくご存じと思います。日本軍もその列強のひとつでした。

当時シベリア在住のポーランド人が蜂起軍を組織して赤軍(ロシア軍)と戦いましたが、戦闘に破れ、約8千人の兵士が赤軍に降伏します。内戦の最中ですから、赤軍も捕虜の処遇にこまり、最終的には日本軍が赤軍と交渉して、数千人のポーランド兵を軍用列車で大連まで輸送し、そのあと船で祖国に送り返しました。こうして日本軍の保護のもとに祖国に帰還したポーランド兵が、123年ぶりに独立を回復したポーランドの軍隊の中核となるのです。

このとき日本軍の援助で祖国へ帰った兵士の一人に、第二次大戦が始まったとき首都ワルシャワ防衛軍の司令官を務めたチューマ将軍がおります。かれは戦間期には、つぎにお話する、同じくシベリアから帰還した孤児たちや、駐泊日本武官とも、とても親しいお付き合いをしていたそうです。

4) 日赤によるポーランド孤児救済

日赤によるシベリアからのポーランド孤児の救済は、100年近い日ポ交流史のなかでも最もインパクトの強い出来事のひとつで、ポーランド社会にたいへん強い印象をあたえ、ポーランドにおける親日感情の最大の源泉といえるかもしれません。

1920(大正7)年と22(同9)年に、日本赤十字社が国際難民救済事業の第一号として、1歳から16歳のポーランド孤児765名を、シベリアから敦賀経由、東京、大阪を経て、123年ぶりに独立を回復したポーランドへ送り返したのです(写真3)。孤児たちを日本船で祖国へ送り返すまでの詳しい事情は、それだけでゆうに一冊の書物になりますので、別の機会に譲りたいと思います。

救済事業の背景には、1920年にシベリア出兵した日本軍がウラジオストックを中心に22年10月まで駐留しており、軍用船の利用が可能だったこと、またポーランド人の救済委員会会長の日本外務省や日赤に対する救助請願に応じて、日本の善意を国際的にアピールしたい状況にあったこと、そして純粋に慈悲の念から積極的に援助に応じる気持ちもあったと思われます。

独立を回復したばかりで、荒廃した国土復興の意気に燃えるポーランドの社会状況のなかで、帝政ロシアに反抗して流刑になったポーランド人の子孫の子供たちが日本の援助で母国に戻ってきたことに、興奮しないポーランド人はいなかったでしょう。国の将来を担う子供たちは国の宝、という気分が国中を支配したのも当然といえましょう。

当時の新聞雑誌類を図書館や古文書館、知人の蔵書などで数多く読みましたが、「義侠心あふれる日本人」「サムライ魂の日本民族」「子供を国の宝として育てる日本人」「桜の花咲く国からの帰国者たち」等々、日本への賛美や感謝の文字があふれています。



写真3: ポーランド孤児(日本赤十字社所蔵)

ポーランドの人々は1904-05年の日露戦争のあと1920年代中頃までに、「桜の花咲く国」日本への熱い思いを胸の底に深く植えつけたのです。日本の援助で母国へ帰還した孤児たちは成人しても、戦間期はもとより、第二次大戦から戦後の共産主義時代になっても、恩義あふれる日本について、家族や友人知人に語り続けました。1922年に1歳だった人は、いま生きていれば92歳です。当時10歳以上で日本の記憶を強く持つ人々はもうほとんどが亡くなりましたが、残された子供や孫たちは、父母や祖父母から日本滞在の話を、目を輝かせて聞いたと、たくさん証言しております。

その由来を知らないままに「桜の花咲く日本」と表現するポーランド人の心の底には、代々受け継がれてきた、往事の日本への感謝や賛美の念がDNA(遺伝子)のなかに刷り込まれていて、日本人をみるとその遺伝子が騒ぐのかもしれません。

こうしたポーランド人の親日感情は、たぶんに「片思い」的などころもあるようです。一方的にポーランド側から惚れ込まれた日本側には、最近でこそ「ショパンの国」というイメージはあるものの、一般には、幅広い親ポ感情があるとは思えません。

とはいえ、「森へ行きましょう、娘さん」をポーランドで最もポピュラーな民謡とは知らずに歌ったり、「向こうの森で鳴いてるカッコウ…」の歌を知っていたり、ショパンの一節「雨だれ」を学校で習ったり、1800年代に帝政ロシアに反抗して蜂起したときの流行歌「ワルシャヴィアンカ」を——70年安保の頃——学生が歌ったりと、普段あまり意識しないのに、ポーランドのものが日本社会に結構浸透しているのも確かです。

ともあれ、ポーランドのように、いたく日本びいきの国があることも知っていただきたいと思います。

写真出典

写真1左(Jozef Pilsduski. Photo 1930): ウィキペディア日本語版; 同右(1903年函館, 井田写真館にて): ピウスツキの仕事—白老における記念碑の除幕に寄せて, 井上紘一編集責任, 北海道ポーランド文化協会, 北海道大学スラブ研究センター, 2013.10

写真2左・右(稲葉千晴撮影): 日本におけるポーランド人墓碑の探索, エヴァ・パワシュェルトコフスカ, 稲葉千晴編集, ポーランド文化・民族遺産省文化遺産局, ワルシャワ, 2010

写真3: 日本赤十字社と人道援助, 黒沢文貴, 河合利修編, 東京大学出版会, 2009.11



北大祭に出店します

手作りのポーランド料理は いかがですか?!



北大祭2014

ポーランドフード

クロキェティ ラツヒイ

ポーランド風コロッケ リンゴパンケーキ

キェウバサ シュレック

ポーランドソーセージ ハルシチ スープ

営業時間
6月5日 6日 7日(木・金・土): 9-21
6月8日(日): 9-14

お待ちしております!



過去のメニュー Best 5

～超オススメ!～

- 【メイン】ポーランド風コロッケ krokiety
ポーランド風ソーセージ kielbasa
- 【スープ】ポーランドのお味噌汁と呼ばれる
シュレック żurek
ハルシチ barszcz
- 【デザート】リンゴパンケーキ racuchy
子供のときから大好きだったよ!

開店のお知らせ

6月5日(木)～8日(日)
9時～21時

- ※日曜日は午後2時閉店。【ご注意】
 - ※土日は混雑が予想されます。
- ポーランド人とのおしゃべり&展示
を楽しむなら、平日がオススメ!

2010年から北海道大学の大学祭で定期的にポーランド人留学生のお店(テント)を出しています。北大祭は毎年6月最初の週末に、市民の皆さんをお迎えして、クラスやサークルの皆さんがさまざまなお店やイベントを催します。食べ物を作って売るお店が多く、留学生たちはほとんどが自分の国の料理を作っています。



出店場所は総合博物館の前あたり(北10西8)。普段日本では食べられないポーランドの食べ物を出します。ぜひ、おいしいポーランド料理を食べにきてください。

北海道大学ポーランド人留学生会



後援: ポーランド広報文化センター
INSTYTUT POLSKI TOKIO

北海道ポーランド文化協会

至札幌駅



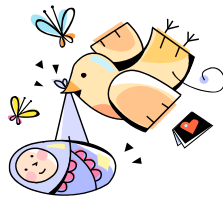
新シリーズ
《北海道のポーランド人から》

百聞は一見に如かず

～日本でPTA会長を体験して～

ラファウ・ジェプカ

来日する前から日本の子供の生活の恐ろしさについていろいろ聞いていました。生まれてすぐ教育レベルの高い幼稚園に登録され、幼いときからどんな大変な状況にも耐え、打たれても壊れない会社員になるために朝から晩まで兵隊のように育てられるというイメージに私は怯えていました。そのため、札幌に来て日本の子供たちの笑顔を見たときは、本当にホッとしました。でも心の中では「これは刑務所から一時出所した嬉しさの表情かもしれない」といった疑念が離れませんでした。二、三回聞いたり読んだりした話がいったん頭に刷り込まれると、取り除くのはとても難しいと痛感させられました。



日本の子供に対するこのようなステレオタイプはいったいどこから来たのかすぐには思い出せないのですが、おそらくその大きな源となったのは、日本に関する旅行記や面白おかしく煽り立てるような記事などです。このような記事は21世紀になってから目立って増えてきましたが、すでに1970-80年代にポーランド人が書いたものにもそのような傾向がありました。のちに英語で読んだ本でも同じような話を何度も見かけたので、多分著者が面白いと思った話に尾ひれがついて、いろいろなところで繰り返されてきたのだと思います。

こうしたステレオタイプを作り上げてきたもうひとつの大きな要因は、ポーランド人同士が会話をするとき、何かについていいことばかりを話すと、自然と「悪いところも言わないといけない」とバランスを保つためにネガティブな「逆の面」も話題にするという傾向で、日本好きの集まりでも「日本人は家族を大事にしない」「日本は引きこもりの国」「日本人はクジラやイルカを殺し過ぎ」など、日本の社会問題について議論が絶えません。

日本に来て、それらの問題が実際どれほどの

Rafał Rzepka

1974年シチェチン生まれ、ボズナニ大学新言語学部卒(日本語学修士)、日本政府奨学金を受けて北海道大学、小樽商科大学に留学、北海道大学大学院工学研究科博士課程修了、現在は同情報科学研究科助教として人工知能の研究に従事。家族は妻と一男。



規模のものなのかは分かりませんでした。テレビにはそういう話題が出ないよう政府がマスメディアを管理しているのではと、社会主義の「嘘」の時代に育てられた私は自然に考えがちです。

しかし、日本語がちゃんと読めるようになり、直接日本人の友達と話したり、インターネットで調べたりできるようになると、日本社会の自由度が分かってきました。問題の規模や一般的な日本人の考え方など、両面を見ながら確認できるようになりました。事実の両面性という問題に興味を惹かれたので、コンピュータによるバイアスのない情報抽出を研究テーマの一つにしました。

とはいえ、私が日本について完璧な知識に達したわけではありません。友達の数も限られています。同じような考え方を持つ人と仲良くなるので、そこから形成される考えはどうしても偏りが出てきます。このように限られた人を通じた知識の形成には限界があります。それではインターネットという手段はどうでしょうか。インターネットで得られるすべての情報を読むのは不可能ですし、コンピュータプログラムに抽出してもらっても、現状では、コンピュータによる言語理解の技術は



意味の処理という点ではまだまだ未熟で、やはり誤った知識が形成される可能性が高いのです。

そこで思ったのは、やはり自分自身の努力が不可欠ではないかということです。日本の大学に入学してその仕組みが大体分かってくると、日本の大学に対するネガティブなイメージはほとんどが作り話だと判明しました。



つぎの心配は、日本に生まれて育てられる子供の将来を決定する環境でした。妻は日本語の勉強をしながら同じ北大でポーランド語を教えていましたし、子供には日本語も必要だと思って長男を保育園に入園させることにしました。ポーランドではそもそも「保育園」(złobek) 自体が非常に評判が悪いので、ポーランドにいる私たちの母たちはパニックになりました。子供がポーランドのやり方のようにほっとかれるか、日本のやり方で兵隊のように厳しく育てられてロボットになるのではないかと心配したのです。

しかし、私たちはステレオタイプの多くが嘘だと分かり(そのほとんどは程度の差か、場所による違いです)、いくつかの保育園を見学し、楽しそうに笑いながら走っている子供たちの姿を見て、ちょっと安心して預けることにしました。それでも心配は残っていましたが、まだ言葉をしゃべらない息子から保育園の出来事を報告してもらうことは不可能なので、先生方が書いてくれる「連絡帳」という情報を唯一のソースとして活用しました。

そのうち突然、保育園をもっと知るためのチャンスが現れました。それは「後援会」です。親が集まり、園長先生や他の保育士のみなさんといろいろなイベントを企画する会です。その集会にはどんな質問でも答えてくれる先生たちと、似た悩みをもつ親たちが参加し、とてもためになったので、さらに大きな安心を得ることができました。活発に参加し一生

懸命な姿を見せてしまったため、私はどんどんと組織の前面へと押し出されました。後援会長に祭り上げられ、勉強だけではなく、例えば子供の安全のための活動にも参加することになりました。

このような経緯で、長男が小学校に入学したときは、躊躇せずに PTA の活動に参加しました。最初は学級代表、そのあとは PTA 副会長に誘われました。保育園と比較したらいろいろ忙しかったので、会長にならないかと誘われたとき、副会長より楽そうに見えたので会長を選びました。普段使わない敬語の多い挨拶がメインの仕事だと聞いて、やっと自分の日本語の大きな弱点の一つをなくすチャンスにも見えました。もちろん他にも大きな理由が二つありました。一つは日本の学校を中から見るができること、二つ目は外国人の立場からのメッセージを発することでした。

「外国人だから無理」というセリフはよく耳にしますが、現実には「地元の言葉が出来ないから無理」というケースが多いと思います。「文化や考え方が違いすぎる」というのは言い訳に過ぎません。個人の「事実を知る気のなさ」と社会の「やる気のなさ」が問題だと思います。

異国の生活や文化に関して、書物やメディアをにぎわせるプロの文筆家の発言には、編集者に面白さをアピールするための誇張もあると思います。国の本当の姿は近くから見るべし、ともいえます。

そこで、専門家ではない私たちが日本の文化、ポーランドの文化について、自分自身で経験したこと、感じたことを率直に《Pole》のようなポーランド好きの方々向けの会報に書くことは、とても価値のあることだと思うのです。ぜひ《Pole》の読者のみなさまといろいろな経験をシェアしたいと思います。今後は北海道に住んでいるポーランド人の声を集めて、ご紹介していきたいです。



PTA 会長として入学式で挨拶する筆者



運動会の挨拶で活躍する筆者



日本におけるポーランド政府の ブロニスワフ・ピウスツキ 顕彰事業に参加して

ヴィトルト・コヴァルスキ

2013年10月19日、この日は秋の陽光のもと、穏やかで熟成した薫りに包まれていた。その薫りは、葎の匂いも軽く身にまとい、きらきらと輝く傍らの湖から木造の広い公共施設の方へと流れ込んでいた。この日、日本の北海道・白老の地を支配していたのはまさしくこのようなオーラであった。ここには、今日では絶滅しつつあるアイヌ民族の生活を再現した野外博物館がある。すでに亡くなった数世代にわたるアイヌ民族の魂が、この祝典にふさわしい天候を彼らの神々に請い願ったのだ。

アイヌの名誉ある同胞ブロニスワフ・ピウスツキは、1903年に白老でアイヌ人のもとに逗留した。これを記念して、彼の胸像の除幕式が「ポランド」という遠国の政府と北海道の行政府の代表者を迎えて行われるのだ。

まず大きなチセのひとつで、強度に日本化された現代アイヌ人である、野外博物館に勤務する老人たちによる祈祷が行われた。アイヌ人たちの間には、新鮮な白樺の皮で編まれた花冠を頭にかぶった「ポランド」国の文化・国家遺産大臣ボグダン・ズドロイエフスキが腰を下ろした。次には招待された来賓たちが色鮮やかなゴザで飾られたピウスツキ像のもとへ赴き、この出来事にふさわしいいくつかの演説のあと(100名を超える来賓がポーランド語

Witold Kowalski (1946-) オックスフォード大学大学院修士、ポーランドの作家、ブロニスワフ・ピウスツキの妹ルドヴィカの孫。ブロニスワフに関しても多く著作がある。昨年10月のピウスツキ像除幕記念セミナーで講演を行った。



でもとりわけ注目に値するのは、井上紘一教授で、彼は日本人や、サハリンに暮らすロシア人にブロニスワフの功績をたゆまず伝えてきた布教者である。

次に来賓は湖畔に並ぶチセを巡回し、多種多様なアイヌの踊りや儀式のデモンストレーションを見学した。残念ながらことばの壁のため、出演するアーティストたちの技能を評価することは、外国人には最後まで困難であった。踊りのあと、立派な祝宴の時が訪れた。そこでは、日本で生まれたピウスツキの孫・木村和保=写真1=が来賓を出迎えた。

シャンパンがほとぼしり、海草類の魅惑的な美しさや、驚くほどツルツルで噛みごたえのある、スライスされた新鮮な(まるで毒入りのような)タコの足を楽しみ、食べかつ賛嘆しながら、何度も杯を合わせて、ポーランド=アイヌ=日本の友情が刻まれた。えり好みしない私の食道に降りかかってきた料理に対する責任感、国際的レベルであると自覚していたので、私は青白い顔をして、褐色の藻や生の海草などをあれこれ味見したのだった。

日本の海底から私の皿へと直接たどり着いたものではない食物に対するノスタルジーを、高級なアルコール飲料で洗い流していたとき、「ポランド」の文化遺産大臣が筆者のもとへ近づいてきた。彼は、ブロニスワフが思春期(1882-85年)に書き残した「日記」のポーランド版完本の初公刊を個人的に援助したいと提案してくれた。大臣は私が編集した「日記」のロシア語版を読み、ポーランド語での出



写真1 除幕式で木村和保氏(左)と筆者

を濃密に耳にしたのはよいことだ)、ズドロイエフスキ大臣が駐日ポーランド大使、北海道副知事らの名士たちとともに除幕を行った。それらの名士たちのなか

写真2 除幕式の祝宴で
ズドロイェフスキ大臣(右)と筆者

版に一役買いたいというのだ。私は驚いて、飲み込んだばかりの「昆布」を吐き出しそうになった。落ち着きを取り戻すと、協定締結の印に、「ポランド」の国家遺産の保護者と、つつましい筆者は色あせた残りのシャンパンのグラスを重ねた=写真2=。

ブロンズ像、ポーランド政府による顕彰、「日記」の原語版の出版の約束、まさにこれらこそ、陽光に溢れて香り立つ秋の日がブロンズワフと妻チュフサンマにささげた贈り物である。生者の間にあって二人に寄り添い、彼らとともにこの日を祝福したのは、もともと強い絆で彼らと結ばれた孫・和保だった。

「わしはその場におった。蜂蜜と……」^{訳注1}

おっと、まだ終わりではない。翌朝、道都札幌の大学で、ブロンズワフにささげる特別な学術セミナーが開催された。

オープニングは駐日ポーランド共和国大使や、ブロンズワフの孫・木村和保と、豪華な顔ぶれであった。続いてセミナーが始まった。最初に井上絃一教授が、セミナーに招待されたが参加できなかったヴロツワフのアントニ・クチンスキ教授からの手紙を代読した。次にワルシャワ大学のエヴァ・パワシュ＝ルトコフスカ教授はブロンズワフ・ピウスツキが生きた時代の日本・ポーランド関係の概要を報告した。残念ながら、この講義は日本語で行われ、通訳イヤフォンの不調もあって〈…〉筆者にはほとんど理解できなかった。

最後に、クチンスキ、井上両教授と同様、ブロンズワフ・ピウスツキ研究に貢献したアルフレド・マイエヴィチ教授は、われらの主人公の栄光にいたる道程、そして彼の残した著述や物質文化資料が現世代の人々へ伝えられ周知されて、ヨーロッパやアジアの諸民族のグローバル文化のなかで卓越した地位を勝ち取るまでの複雑ないきさつについて語った。マイエヴィチ教授は英語で話し、日本製の視聴覚機器は、彼に対しては戦いを挑むことなく従順に従った。〈…〉

筆者もこれらの学術的脱線の間割ってはいり、

ピウスツキ族の民族帰属、両親がブロンズワフ、ルドヴィカ、アダム、そしてまたピウスツキ家の他の兄弟たちに授けた、才能や天賦の才のみならず、欠点や苦悩をめぐる遺伝的悶着についても考察することを提案したのだった。

そして筆者が自身の高邁な結論へと到達しようとしていた矢先、小さなサイズのひらひらとした白い衣装を身にまとった、エネルギー満タンの生物集団が会場のなかへ走りこんできたのを目の片隅で確認し、地球外生物の襲撃に違いないと判断して〈…〉話の流れを省略し、急ぎ足で話を終えた。

パニックを起こす必要はまったくなかった。〈…〉それは札幌こどもミュージカルの若い(幼いといってもいい)アーティストたちだったのである。この作品は体育の授業の前のエネルギーッシュなウォーミングアップのようにもみえるし、(関係者の話では)「ピウスツキの蠟管」に記録されたアイヌ語の祈祷のテキストに関する思想的な「ミュージカルオペラ」のようでもあった。〈…〉

「わしはそこにおった。蜂蜜とワインを飲み、自分の目で眺め、貧弱な耳で聴いたのじゃ……」

おっと、まだ終わりではない。ブロンズワフについての「オペレッタ」にほろ酔い加減になった北海道大学の主催者たちは、以前の取り決めを反し、マイエヴィチ教授や私の講義の完全な英語テキストを、知識を渴望するインターネット利用者に提供することを決定した。北海道大学の演壇上でパニックを起こした筆者の様子とはうらはらに、そこで語られたことは何ひとつ省略されないことが、業(カルマ)によって決定された。ご興味のある読者諸兄は、以下のリンク(北海道大学 HUSCAP)を参照のこと。

<http://hdl.handle.net/2115/53485>

また、白老の銅像のスポンサーである駐日ポーランド大使館は、この機に「ポーランドの偉人」10人の肖像画入りの小さな(とはいえ価値のある、唯一の)日本郵便記念切手シリーズも発行した。80円切手が10枚並んだシートの上で、ブロンズワフ・

写真3 ブロンズワフ・ピウスツキ像
建立記念切手シート

ブロニスワフ・ピウスツキ像建立記念
北海道白老 ニ〇一三年十月十九日

ポーランドの偉人
ミコワイ・コペルニク(1473-1543)天文学者
ヴィスワヴァ・シンボルスカ(1923-2012)詩人
ヤヌシュ・コルチャック(1878-1942)教育者
ユゼフ・ピウスツキ(1867-1935)政治家
アンジェイ・ヴァイダ 映画監督
レフ・ヴァウエンサ「連帯」指導者
ヨハネ・パウロ 2 世(1920-2005)ローマ教皇
フリデリック・ショパン(1810-1849)作曲家
イグナツィ・パデレフスキ(1860-1941)ピアニスト・政治家
マリア・スクウォドフスカ・キュリー(1867-1934)物理学者

写真3の記載内容

ピウスツキの胸像が存在感を示している=写真3=。

そのあと10月25日に東京の首相公邸で外務省主催のレセプションがあって、井上教授のご好意でマイエヴィチ教授と筆者もこの歓待にあずかった。公邸を退出するとき、井上教授は安倍昭恵首相夫人(…)に、マイエヴィチ、コヴァルスキ両名の講義を収録し、タイミングよく北海道大学により発行された記念冊子『ピウスツキの仕事』を手渡した。「宣伝広報活動」の領域では常套の、井上教授の作戦は完璧な名人芸だった。安倍首相ご本人に冊子を手渡しても、首相はすぐに(…)その存在を忘れてしまっただろうが、(…)非凡なアイデアでよく知られる昭恵夫人が何かの拍子に、もし同冊子を手にとったなら……

「わしはそこにおった。蜂蜜とワインを飲み、別れ際に首相夫人から彼女の肖像画入りの石鹸のようなもの(もしかするとチョコレート)もいただいた」

今度こそは、終わりがやって来た。

実際は、やって来たのは、終わりではなく続きだった。正確には二日後に、ブロニスワフの唯一の男系の孫であり、ピウスツキ家の男系最後の生き残りの和保(運命は彼に娘のみを授けたから、男系は彼で途絶える)が、ブロニスワフの子孫と家族の集まりに筆者を招待してくれたのである。

読者諸兄に知っておいていただきたいのだが、ブロニスワフはチュフサンマ以外の、いかなる女性との間にも子を持たなかったし、彼の孫、ひ孫、玄孫はすべて、現在は日本に住んでいる。東京のレストランでの会食には、別々の家系を代表する十数名の子孫が集まった。北海道からはブロニスワフの娘キヨの孫・須藤由美と高橋睦雄の両家系、横浜からはブロニスワフの息子木村助造の息子と和保の家系の人々がやって来た。全員の名をすぐに覚えるのは不可能で、筆者はすっかり途方に暮れた。

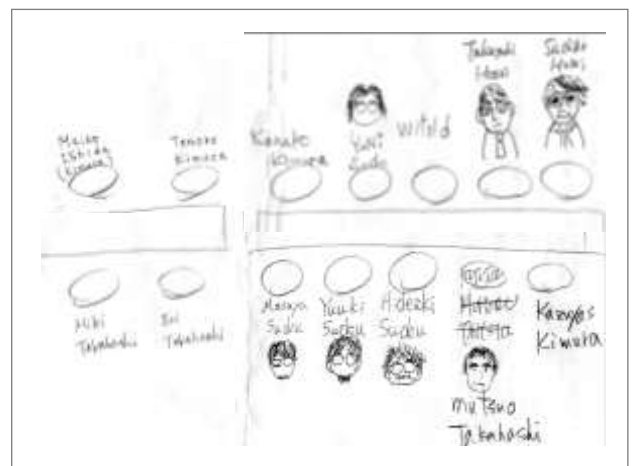
和保の勇敢な長女加奈子は機転を利かせて、ヨーロッパからやって来て頭がのぼせた筆者のために席次図=写真4=を素描してくれた。(…)

状況をよく理解するのはそれほど容易ではなく、推測するのはさらに困難だった。というのも、神ははるか昔に、ことばの壁をわれわれに与えたからである。そこで助けとなったのは、ビールと酒である。カプトイカとヤリイカを交互にかじり、辛い海草の入った料理を食べながら、お互いを理解しなければならなかった。

筆者は日本で10日間暮らしたあと、日本料理のかかえる問題に意識的になった。糖尿病、がん、活性酸素、福島原子力発電所の最近の事故後に残された放射性同位元素の問題などを知ったので、褐色の海草どころではなかった(名称からしてややこしい。調理後は、この海草はいっそう緑になるのだから)。日本酒は爛でも、冷やでも、何ともいえないほど素晴らしかったが、杯を数杯傾けると、世界はいっそう理解し易くなった。(…)

さらに数杯を重ねるや、畏怖の念を起こさせる睦雄は、1906年に彼の曾祖父ブロニスワフが曾祖母チュフサンマ(と二人の子供)を運命にまかせて、海の彼方へ永久に去った(彼女の業(カルマ)は、彼らにはそういう風にみえた)のは何故か、筆者には本当に分からないのだということを理解してくれた。

写真4 ピウスツキ家の交歓会(上)と席次図(下) 写真・須藤秀明



さらに数杯おかわりをし、睦雄の姉・由美とは、まるで記憶にないほど前の時代から私たちが互いに知っているかのように、親戚として固い握手を交わした。一方で、私は魅力的な加奈子に、自分には未婚の息子がいて、彼女も未婚であることを執拗に説明していた。もし話の折り合いがつかなら、何もいうことはない……

これでブロニスワフ・ピウスツキにささげた祝典も終わりを迎えた。「わしはその場におった。蜂蜜とワインを飲んだが、あごひげをつたわるばかりで、口には一滴も入らなんだ……」^{訳注1}

しかし「ポランド」の国家遺産の現在の相続人と締結した協定はどうなるのだろうか。それは守られるだろうか。よく知られているように「神の恩恵はまだら馬で騒ぐ」^{訳注2}。一方では *pacta sunt servanta* (合意は拘束する)ともいわれる。〈…〉昔はそうだった

だが、現在はどうかは、やがてわかるだろう。一年か二年後には、新刊の『ブロニスワフ・ピウスツキ日記』について書評が読めることになるかもしれない。〈…〉 (佐光伸一訳)

^{訳注1} スラブの昔話の結びの決まり文句。「〈…〉蜂蜜とワインを飲んだが、あごひげをつたわるばかりで、口には一滴も入らなんだ……」と続く。

^{訳注2} ポーランドのことわざ、正確には「神の恩恵はまだら馬に乗る」。権力者、金持ちの約束は当てにならないという意味。

ポーランド語原文: Witold Kowalski, “Polska honoruje w Japonii Bronisława Piłsudskiego”

※スペースの都合で、一部割愛〈…〉しました。

《できごと》



ポーランド広報文化センター
INSTYTUT POLSKI TOKIO



駐日ポーランド共和国大使館

ブワシュチャク新所長 ご来札!

私たちのよきパートナーであり、さまざまな企画でお世話になったポーランド広報文化センターのミロスワフ・ウチュコ前所長が本年1月に任期を終え、2月末に着任されたミロスワフ・ブワシュチャク新所長が4月1日に運営委員会を来訪されました。

新所長はシロンスク県(県都カトヴィツェ)のタルノフスキェ・グルィという人口6万人ほどの町に16年前に日本文化センターを創設し、その所長を長く勤めた経験を踏まえ、「地方」「文化」という視点から、北海道ポーランド文化協会とよい関係を築きたい」と語られ、6月に開催される二つの例会への全面的な支援を約束してくださいました。(佐光伸一)



ブワシュチャク新所長(前列左から3人目)を迎えて

5月3日「憲法の日」の レセプションに参加



「憲法の日」レセプションで(左から)大使、遠藤、霜田、安藤

5月15日に、コザチェフスキ駐日ポーランド大使主催の「憲法の日」のレセプションにお招きをいただき、安藤(会長)、霜田英麿(東京事務所長)、尾形(運営委員)が参加しました。約300人出席の盛会で、在京会員の遠藤郁子さん、熊倉ハリナさんにもお会いしました。

大使はご挨拶で、今年は新生ポーランドの出発点となった「自由選挙」から25周年、NATO加盟15周年、EU加盟10周年という節目の年にあたり、ポーランドと日本の友好・協力関係は、政治、経済、文化にわたって飛躍的に発展し、新たな段階に入りつつあると強調されました。(安藤厚)

写真・尾形芳秀

今後の活動予定

〈第 68 回例会〉朗読会
「午後のポエジア」



日時：6月14日(土)
午後2時(開演30分前)
場所：北海道大学クラーク会館3F
国際文化交流活動室

〈第 69 回特別例会〉(東京にて)講演会
「樺太時代に生きたポーランド人」

日時：6月28日(土)
午後2時~4時
場所：駐日ポーランド共和国大使館
(東京都目黒区三田2-13-5)
講師：尾形 芳秀 氏

※どちらも同封のフライヤーをご参照ください。

〈第 28 回〉定例総会

日時：10月中旬
場所：検討中

ご寄付ありがとうございます

感謝をもってご芳名を掲載いたします。
栗原朋友子(4)
※()内は口数:1口千円、敬称略

会費納入のお願い

本年度も残すところ4ヵ月になりました。会費未納の方は至急納入をお願いします。当協会の活動は皆様の会費で賄われています。引き続きご理解とご支持をよろしくお願い致します。

【郵便振替口座】02740-5-19735

【名義】北海道ポーランド文化協会

※郵便局でATM扱いなら手数料は無料です



ポーランド & ニッポン歳時記



1992年より作句する。俳句協会選者。「夏至」同人。
〈岩見沢市在住。霜田千代磨さん〉
俳句協会。北海道俳句協会選者。「夏至」同人。

春の沼鳥獣乱舞夜光杯
(季題「春の沼」)
千代磨

帰る雁エロス・タナトス(死)海越えて
(季題「帰る雁」)

越中の菓屋くる日四月馬鹿
(季題「四月馬鹿」)

祝祭日週間

ポーランドでは祝祭日期間が続いています。「神のいつくしみの主日」の祝日には、教皇ヨハネ・パウロ2世が聖人として宣言されました。「神のいつくしみの主日」は復活祭後の最初の日曜日、ポーランドの修道女・聖ファウステイナのおかげで広まりました。「神のいつくしみの主日」からの1週間は、ポーランドのカトリック教会では「いつくしみの週間」として祝います。

さらに、今年はちょうどこの期間中に「職人・聖ヨセフ」の日と、5月3日の「ポーランド女王・聖処女マリア」の祭日がありました。

また、5月3日は「5月3日憲法」の記念日でもあります。私たちの住む地区では、家々に国旗が掲げられ、私たちの建物もきれいに着飾っています。

złota forsycja

れんぎょう
連翹の

pochylona nad płotem 塀に乗り出し

pilnuje domu

やもり
家守かな

〈ボズナン市在住。津田モニカさん〉

幼いころから文学に親しみ、特に日本の文学に興味を覚える。俳句は4年前から詠みはじめる。

北海道ポーランド文化協会会誌

POLE 第 82 号 (2014 年 5 月)

目 次

| | |
|---|----|
| 〈第 68 回例会〉朗読会へのご招待「午後のポエジア」 part4 | 1 |
| 〈第 69 回[東京]特別例会〉尾形芳秀「樺太時代に生きたポーランド人」 [案内] | 2 |
| 栗原成郎〈都市の伝説～トルン 1〉「トルンの町の名の起こり」 | 3 |
| 岡崎恒夫〈ラジオ深夜便より〉「ワルシャワの地下鉄」 | 4 |
| 松本照男「日本に近親感を持つポーランド人」 | 5 |
| 手作りのポーランド料理はいかがですか?! 北大祭に出店します (北大ポーランド人留学生会) [2014.6.5-8] | 9 |
| ラファウ・ジェプカ〈北海道のポーランド人から〉「百聞は一見に如かず～日本で PTA 会長 を体験して」 | 10 |
| ヴィトルト・コヴァルスキ「日本におけるポーランド政府のピウスツキ顕彰事業に参加 して」 | 12 |
| 佐光伸一「ブワシュチャク新所長ご来札!」 [2014. 4.1]、安藤厚「5月3日『憲法の日』の レセプションに参加」 [2014.5.15] | 15 |
| 霜田千代麿・津田モニカ〈ポーランド&ニッポン歳時記〉 / [事務局より] 今後の活動予定: 朗読会「午後のポエジア」、〈第 69 回 [東京] 特別例会〉講演会 [尾形芳秀]「樺太時代に生 きたポーランド人」、〈第 28 回〉定例総会 | 16 |